

ハイヒールを履いた美人教師のむっちりした美脚が、少年たちの嗜虐心しぎやくしんをそそった。尻を突きだした格好にさせると、お尻の穴も性器も、焦げるような目で見つめられた。「たまんねえよ」

亮がズボンのチャックをおろすと、トランクスからペニスを取りだす。その光景があまりに衝撃的だった。

（そんなつ。ウソよ）

初めて見る男性器が教え子のものだとは、少なくとも一時間前は想像もしていなかった。その側で、琢哉もズボンのチャックをおろす。

「おまえの、すげーなっ」

「いや、君にはかなわないよっ」

妙な謙遜けんそんの態度を見せて琢哉がふつと笑う。

「だって、遥香先生を犯せるんだぜ。半年待った甲斐があつたな」  
聞き捨てならない台詞せりふだった。遥香は顔をあげて叫ぶ。

「な、なんですって、そんなつ。あなた、最初から……私を」

「先生、力抜いて、ほらっ。入れるよ。大丈夫。オレ、慣れてるよ」  
その質問には答えないまま亮が言った。

「いやっ、離して！ うぐっ」

問答無用だった。亮が力任せに手を後ろ手にひねると、股間の肉を引き裂くようにペニスを侵入させる。

「いっ、痛いっ、やあああっ」

泣いた。それしかできなかった。狭い膣口が無理やりにひろがっていく。裂けた処女膜から鮮血がしたり、太腿に筋を作った。ついに若宮遥香は、愛したはずの生徒に、信じたはずの少年に犯されたのだ。

「すげっ。うああ、処女ってヤッパいいなっ」

亮が叫んだ。遥香は必死に足を締めつけたが、無駄だった。ペニスは臆面おくめんもなく最深部まで埋まると、肉奥を押しあげる。

「んああっ」

痛いだけだった。それで、足の力を緩めた。それでも絶望的に痛い。焼けた鉄をねじこまれているようだった。

藤本亮は持ち前の筋肉をバネのようにして、ピストンをしてきた。執拗な愛撫のわりには、行為は実に淡泊だった。あっという間にペニスが引き抜かれると、背中に熱い液体がポトポトとこぼれてくるのがわかった。



「すげえ、先生の、たまんねえ。こんな早いの初めてっ」

引きだされた亮のペニスが余韻を楽しむように震えている。

「よし次は、僕だ」

バトンタッチをして渋谷琢哉がつづいた。彼は手慣れたように腰をつかむと、同じくバックでペニスをねじこんできた。

「ぐっ、うぐっ」

上半身が反りかえって、乳房が突きだした。琢哉の手が覆いかぶさる。上半身をしっかりと固定されて、杭を打つように肉奥を打ち据えてくる。

（そんなっ。こんなのっ……）

おなかをねじられて痛いばかりだった。遥香は女として感じるにはあまりに未熟だった。

が、琢哉の挿入は実によくもった。泣きじゃくる遥香をよそに、マイペースで抜き差しをすると、最後は床に膝をつかせて、眼前にペニスを突きつけ射精した。

「いやっああっ」

汚らわしかった。精液が顔全体に飛び散った。やけどしそうなほど熱かった。

「ほーら、最後だぞ。裕貴っ」

亮が叫ぶ。その言葉に裕貴がビクリとする。体をすくませて股間を押さえた。

「なんだ、怖<sup>お</sup>じ氣ついたのかよ」

「違<sup>ちが</sup>うよっ」

裕貴は顔を赤らめてそう言った。ズボンのチャックをおずおずおろす手が震えている。二人を氣にしながら、そうっと、ペニスを引きだした。

それを見て亮が叫んだ。

「うわっ。おまえっ。勃起してもすっぱり皮かぶってやんの」

「ほら、馬鹿にするだろ。だからいやだったんだ」

とたんに裕貴が涙ぐむ。冗談冗談と言いながら亮が苦笑う。

「できるんだよ。これでも、たぶん……」

「裕貴君、やめなさいっ。あなたは、そんなことできない子よ」

「違<sup>ちが</sup>うよ先生。ちゃんとできるんだ。ほらこうするんだ」

亀頭を窮屈そうに食いしばっている包皮を剥きだすと、エラを張ったペニスが反りかえる。遥香の目の前でたくましいペニスおとが躍った。

「そんなんっ」

「先生、僕、若宮先生が好きだ。ずっと、好きだったんだよ」